

死の人類学⁽¹⁾

クネヒト・ペトロ

“... des questions se posent à propos de la mort, que le sentiment ne peut résoudre puisqu'il les ignore. Déjà pour les biologistes la mort n'est pas une donnée simple et évidente; elle est un problème offert à l'investigation scientifique. Mais, quand il s'agit d'un être humain, les phénomènes physiologiques ne sont pas le tout de la mort.”

Robert Hertz

「うらを見せ おもてを見せて ちる紅葉」

貞心尼文書 伝良寛

死というものは決して人類だけに限らない。更に人類だけのことを考察してみても、死は勿論新しい出来事、又は新しい問題ではない。人類の誕生以来、人間は必ず死に接せざるを得ず、死について考えもして来た。人間関係を始め、死は宗教、哲学、経済、自然科学のあらゆる分野に影響を及ぼし、これらの成行と発展と離して、考えられないといっても過言ではなからう。それにしても、死という問題に何らかの理由でより深く突っ込み、追究しようと努める時代もあれば、それほどの関心を持たない時代もある。現在ほどどちらかと言えば、前者の方ではないかという印象を受ける。特に今世紀の70年代に入ってから何かの形で死の問題を取りあげる書物は急激に増えて来た。なかには、一般読者の間にも広く興味をひいているのは「安楽死」や「死後の体験」などのようなテーマについては論ずるものである。但し医学や心理学などと別に、特に歴史学の方面では研究が促進されている⁽²⁾。

1. 著者の紹介。 このように死に関する感心が高まるにつれて、特に臨床医学の在り方が改めて評価され、批判されて来た。こういう動きの中から死んでいく人の心理的精神的状态とその医者や看護人による扱い方、さらに又家族や一般世間の死者に対する態度を見直し、研究する為に“thanatologie”[死学]という新しい学問が生れた。『死の人類学』を書いた L.-V. Thomas 氏はフランスの死学会の創立者の一人である。現在はパリのルネー・デカルト大学で社会学を教えている。氏は、長年に互って西アフリカのダホメなどで民族学上の調査を続けて、それらの諸民族の宗教とか心理、そして特に死の観念やその意義について多くの報告書を表わしている。氏はまた、アフリカの宗教民族学を初め社会学と心理学、そして精神分析学などの学際的

な分野において活躍しているのである。

2. 『死の人類学』における「人類学」の意味と著者の研究方法を先ず紹介してみよう。死とは、普遍的現象にもかかわらず、それぞれの関係者の立場によって見方が違うし、それぞれの文化の特質によっても又基本的に見方は違う。しかしこのような立場はすべて何らかの神話、何らかのイデオロギーに基づいているので、このような片寄った解釈を乗り越える為にすべてを包含する総合的な学問が要ると著者がE.Morinの文章を借用しながら言っている。このような総合的な学問だけで以って初めて人間を通じて死を知ると同時に死を通じて人間を知ることが可能になる⁽³⁾。死自体は人間だけの特長ではないにもかかわらず、人間だけにみられる特色は「死んだ肉親を葬る動物」であることではなかろうか。道具を造って利用したり、言葉を通じて仲間とコミュニケーションしたりする側面において、動物と人間との間に存在する差違は程度の問題しかないと言っても良いように対して、死者を葬ることによって人間は自然の動物の世界を出て文化を有する動物の世界への境を越えたと言えよう。即ち文化の一側面を指摘して、悪質の影響を追払う為に屍の物質を再び共同生活の中へ統一させようとする一定の民族の努力は文化であると言えるのではなかろうか。成程こう考えると、死に対する態度は人間理解への鍵となり、或いは又、人間の観方は死を理解する鍵になろう。

このような総合的な死学的人類学⁽⁴⁾を設立する為にどうしても必要な方法は比較である。時代の歴史的相互比較の他に、地域と地域を比較する方法などが考えられる。著者の選んだ方法は二種の社会を比較する方法である。一方は情報が揃った、よく知られている現在の古風な伝統社会(“société archaïque”, p.12)である。これにネグロ・アフリカの伝統的社会を事例に選ぶ。この対象として、自分の社会、つまり機械化され、生産を第一にしている産業社会(“société industrielle”, p.12)を選び、これを「西洋」(Occident)と呼ぶことにするが、フランスが中心に、その他に主として英国と合衆国を参考に取りあげている。

比較の要になっているこの各社会の本質を著者はどうみているかをもう少し詳しく紹介してみよう。人類学の対象である人間は必ず歴史的社会的前提によって特定された世界に生きている。このような世界は数多くあっても、それを構成する基本的な要素は何時も同じもので、これらをお互いに結び付ける物乃至媒介する物も基本的に同じである。即ち、個人と集団と動物と人間が住んでいる世界(生態とも言えよう)という四つの基本的要素は技術の利用、又は神話や物語を創作する想像力の活動、この二者の媒介でお互いに関連し合っている。このことに焦点を合わせると伝統社会と産業社会との個々の特徴ははっきりと浮き彫りにされる。伝統社会とは人間の生命と人間自身も一部分しかない彼らの世界の生命を尊敬する社会である。この尊敬を生かす為に、社会は大いに象徴の使用に頼らなければならない。この社会は技術などに乏しくて、「人々を蓄積する文明」と呼んでいい。これと違って、産業社会は人間を含めてすべてを物としてみる傾向がある。そして潤益率をあげるのに自然をますます破壊する。これを支持するのは意味豊かな象徴ではなく、空虚のイデオロギーだけである。人間に代って、物品

が重視されるので、このような社会のことを「物品を蓄積する文明」と著者が呼んでいる⁽⁴⁾。

3. 論旨の要点。 著者は、四つの点に分けて、論を進展する。「死」という現象をどう定義するかということから出発しようとし、「死」は一つではなく多数であると指摘する。物理と生物と社会、各世界において死が起るし、その各々の死には人間とも何等かの関係をもっているが、文化的に見ると、人間にとって動物の死が殊に深い意味を有する。動物を自分の代わりに死なせることもあるからである。

死の多数の形態から人間の死を選んで、これについて論ずるが、「死の人類学」を成立させようとするなら、死に関連する諸行為を記述するばかりか、むしろ生きている人間は死について理論的に考慮する必要がある。こうして見ると人間の死を考える場合には、死がもっている「共同体」と「無意識」との関係はどれ程深い分かる。だから社会学の業績も勿論、心理学、特に精神分析学が得た洞察はこのような考慮にとって重要なものである。

次に死の体験を問題にする。勿論、人間が死ぬので誰でもいずれ死を体験するが、この経験を我々に述べ伝えることは出来ない。従って体験出来るのは人が人に与えた死と他人が死んだということしかない。しかもこのような体験を概念で以て把握しようとするとなアフリカの伝統社会と西洋の産業社会の文化的差違が露呈される。個人 (personne) のことを例としてとりあげてみると、伝統社会における死は重大な変化を意味するが、死後の世界では生前のことが象徴のレベルで繰り返される。これに対して、西洋社会では身体と魂が完全に分離され、靈魂さえも永久に「死ぬ」可能性もある。そして信心のない人なら死は当にすべての絶滅にすぎないのである。

死の体験と密接な関係をもっているのに、死に対する態度を別に考察しなければならない。この態度の対象になる物として屍と死人 (死んでいく人) と死自体の三つが考えられる。この場合にも伝統社会と産業社会の特徴が明らかにされる。伝統社会の場合には、象徴を利用する儀礼に応じて、死の恐るべき衝撃が和らぎ、生と死の均衡が別なレベルで新たにとられる。それから個人はあくまでも集団の一員として見られる。これと逆に、西洋社会は優れた技術のお蔭で死を克服できると信じ、事実上死を否定している。だから死を象徴的に乗り越えることも出来ず、死に近い個人は集団に見捨てられる。伝統社会において死の神秘性が死を聖なるものとするが、ヨーロッパにもそのような時代があった。しかし、18世紀以来、死の非神聖化が進むにつれて死んでいく人はますます人の目に触れないように社会的に隔離されてしまった。

最後に、著者は死の記号論を試みて、死における想像の意味と役割りを考える。死の複合体^{コンプレックス}、つまり人類全体と特定の社会と個人は死に対してもっている諸関係は言語と類似するように分析出来る。そうすると死についての言葉と言語としての死の外に象徴の役目も検討する必要がある。死の言語は各社会によって違うが、目的は同じである。つまり、全能たる言語の力によって社会は死に対して取るべき態度を統制する。象徴は儀礼と共に伝統社会において殊に明瞭に見られる役割を果す。死に対して生の方を強調するのは大切なので、象徴で以て死を否定する

のではなく、死には生活において相応しい位置を与えるのは目的である。西洋社会では象徴がこのような意味を失ったので、死んでいく個人を集団の中で支える力がもうないのである。

4. 評価の試み。 著者が言うにはこの労作は死に関する資料の新たな総合的試みではなく、既知の新たな配置だけである。従って解決された問題より解決されていない問題は沢山残されている。扱った資料にも、方法にも、そして解釈にも数多くの疑問と問題点があると思う。しかしある意味で「応用人類学」の一例とも言えるこの本は実に示唆に富んで、多くの刺戟を与えてくれる。論考は緻密で、特に精神分析に関して知識の浅い読者には難解の箇所がある。産業社会の利得中心の態度が記述される箇所は情熱的で評論風であろうが、死への教育学を旨として著者は深く反省させてくれる。死は社会にとって如何に重要な出来事であるかをこの本を読んで改めて感じる。

- (1) Louis-Vincent THOMAS. *Anthropologie de la mort*. Paris, Editions Payot, «Bibliothèque scientifique», 1976, 540p.
- (2) 医学では, Elizabeth Kübler-Ross, 歴史学ではフランスの学者 Edgar Morin, Philippe Ariès, Michel Vovelle, 雑誌“Annales E.S.C.” vol. 31-1, 1976の特集号「死をめぐる」, それから哲学では V.Jankélévitch 等の緒著書を参照。
- (3) “... une science totale qui nous permettra seule de connaître simultanément la mort par l’homme et l’homme par la mort.” (E.Morin, Paris 1970 : 16) p.10.
- (4) “anthropologie thanatologique”(p. 11), “anthropothanatologie”(p.10).
- (5) cf. p. 100とpp. 290・291.